

## 教 職 員 の コ ー ナ ー

### 「電車男」を観ました。

近藤 裕

先日、「電車男」という数年前に人気があったTVドラマのビデオで観ました。日本の友人が某TV局の年末特別企画として第1話から最終話まで一挙再放送したものをダビングしてくれて、普段連続ドラマを全くと言ってよいほど観ない私でさえも全話を完観(?)してしまいました。

ストーリーの内容はアキバ系とよばれるアニメ好きのオタクの青年が偶然出会った女性に想いをよせ、インターネットの掲示板で知り合った仲間と相談をしながら、恋愛を成就するというものでした。

私自身、恋愛ドラマが特に好きなわけでもないのですが(ちなみに韓流ブームには完全に乗り遅れ、未だに韓流スターもほとんど区別ができません)、なぜ10数話にもわたる物語を飽きもせず観れたのだらうと考えました。そして知らぬ間にオタクの主人公に共感したからではないかと思いました。

私は主人公とちがってアニメやコンピュータゲーム、フィギュアに全くと言ってよいほど興味を持っていません。ですが、主人公のそうした物事への深い気持ちは何となく理解できるのです。他の人が何とも思わないものでも、自分の好きなものにこだわって、追究したいと思う気持ちに「何となく分かる」と言いたくなるのです。

私が幼かった頃、仮面ライダーカード集めが流行しました。仲間の持っていないカードを手に入れたくて、小遣いの全てを使ってライダーズナック(スナックのおまけにカードが付いてきたのです)を買ったものです。スーパーカーブームでは、車の形の消しゴムを何十個も集めたり、清涼飲料水のピンの王冠の数を仲間と競ったり(王冠の裏にスーパーカーの絵が描かれていたのです)、「ランボルギーニ カウンタック・・・水平対向12気筒・・・」と車名とその特徴を暗唱し、友人に自慢げに聞かせました。大人になってからは、大のオートバイ好きで、今までに10台ほどを乗り継ぎました。そして「電車男」の主人公がフィギュアに話しかけるように、愛車に話しかけることもよくありました。夜、帰宅すると、車庫の中のオートバイが自分の帰宅を待っていてくれたと本気で感じたことさ

えありました。実に不気味です。

私の周りにも、こうしたオタクっぽい趣味を持っている友人が少なくありません。例えば、格闘技に一方ならぬ情熱を注ぐ友人がいます。別に格闘技をするのではないのですが、古今東西の格闘技に精通し、タイガーマスクを心の師と仰いでいます。自動車に執心で、今までに所有した車は50台ほど。先日「日本で数台しか現存していないイギリスの名車を手に入れた。」と聞いたこともないような名前の車を自慢してきました。スニーカーを100足近く所有している者もいました。(足は1組だけなのに、なぜそんなに必要なのでしょう)クワガタムシの飼育に情熱を傾け、オールシーズン24時間空調がつけっぱなしのクワガタムシ飼育用の部屋をつくった友人もいます。

彼らは純粋で、大人になっても子どもの気持ちを忘れない愛すべき人たちです。ですが、私にすれば(自分のことは棚に上げて)、「もう少し、程度を考えればよいのに」と思うのも確かです。(まあ、大きなお世話ですね)自分の子供ならなおさらです。今年7歳と4歳になる私の長男と長女はよくコンピュータに向かっていきます。巧みにマウスを操り、インターネットを楽しんでいます。カード集めも大好きです。こんな彼らを見てみると、「うーむ。凝り性なのは悪いことではないけど、やっぱりなあ・・・。オタクになったら困るなあ」と親っぽく思うのです。そして、「どんなに好きなものに凝っても、コンピュータゲームやフィギュアだけが友達の間にはならないでほしいなあ」と本気で思うのです。親の勝手でしょうか。

### < 転出したお友達 >

佐々木 佳佑 さん (小学部4年)  
河村 聖也 さん (小学部4年)  
松田 衣里加さん (小学部5年)  
佐々木 美菜 さん (小学部6年)  
佐々木 亮佑 さん (中学部2年)

「お世話になりました。お元気で。」

ようこそ釜山日本人学校へ >  
小野 玄樹 さん (小学部3年)

「宜しく願います。」